

コロナ禍と教育・研究

京都大学特任教授 高見 茂

コロナの感染拡大が止まらない。それは教育研究にも多大な影響を及ぼしている。筆者は2月5日に3回目のワクチン接種を行ったが、腕の痛みは初回、2回目と変わらないが、腋の下のリンパ節の痛みが出てきた。ネットで調べると同様の副反応が出ているケースが約3割もあるとの情報が出てきた。発熱等の症状はないものの、医学研究者の見解もコロナワクチンの危険性を指摘するものもある。たとえば、欧州連合（EU）の医薬品規制当局は、新型コロナウイルスワクチンのブースター（追加免疫）接種を頻繁に行うと免疫系に悪影響を及ぼす恐れがあると警告している。また、欧州医薬品庁（EMA）は、4カ月ごとのブースター接種を繰り返すと最終的に免疫力が低下する可能性があるとも指摘した。そして各国はブースター接種の間隔をより空け、インフルエンザ予防接種戦略で示された青写真のように寒い季節の到来に合わせるべきだとの見解を示した。

教育・研究にも今回のコロナ禍は様々な影響を及ぼしている。筆者はこの3年近く科学研究費による海外調査や国内のヒアリングができず研究が停滞し、直接的な最新の情報に接する機会を逸してしまった。ネット、オンライン、文献調査では自ずと限界があり、現地での状況に応じた資料収集は研究の進捗には不可欠な手続きであった。年齢からして最後の科研費による研究であっただけに残念でならない。

さらに初等・中等教育分野にも様々な影響が及んでいる。すなわち世界銀行は、新型コロナウイルス禍の学校閉鎖などによる学力低下で、生徒らが生涯を通じて得られるはずだった収入を失い、世界全体で損失額が17兆ドル（約2千兆円）に上る可能性があるとの試算をまとめている。コロナ危機で世界中の教育システムが停止し、16億人以上が学校閉鎖の影響を受けたと指摘。損失額は世界の国内総生産（GDP）の約14%に相当するとした。特に、学習機会を失った子どもは読解力や計算能力が低下したとし、学習危機が長引いており「子どもや家族、世界経済に壊滅的な影響を与える可能性がある」と危機感を露わにした。

しかし「禍福はあざなえる縄の如し」との格言があるが、今回のコロナ禍においても正鵠を射ていると思われる。高等教育の領域では仕方なく導入したオンライン授業ではあったが、未来に繋がる対面・オンライン混合型の授業（HIFREX 授業）が一気に拡大した。リアルなオン・キャンパスの枠を超えて、バーチャルなオフ・キャンパスへ大学教育は拡張され、海外留学の在り方も大きく様変わりする事になった。この事は航空機を利用したリアルな海外留学に伴う環境負荷を抑え、温室効果ガスの抑制策としても細やかな貢献が期待できる。初等・中等教育において、わが国では教育の情報化が遅々として進まなかったが、コロナ禍によって児童・生徒一人1台学習者用PCと高速ネットワーク環境の整備が一気に前倒して進んだ。当初は5年計画で進める予定であったことから、コロナ禍がなければさらに教育の情報化は遅れていたものと思われる。コロナによって奪われた日常は余りにも大きいですが、この災厄のもたらせた試練を乗り越え明るい未来を創ろうではないか。